

真の国際英語／偽の国際英語

塚 脇 真 由

はじめに

今日、グローバル化がますます進み、世界が一体化してきているということはあらためて指摘するところではない。私たちは、このようなグローバル化された社会の中で意思疎通するとき、つまり共通の母語を持たない人と意思疎通する為に、主に「英語」を用いる。これが世界共通語としての英語(English as an International Language : EIL)である。今や、英語は母語話者の文化と結びついた「民族語」としてよりも、むしろ非母語話者同士の「補助語」としての役割を担っているといっても過言ではない。母語として英語を使用する人より、圧倒的に多い人が英語を「国際補助言語」として使用している。そのため、それぞれの国や地域の文化が反映された多様な種の英語が存在するようになった。

これまで、多くの「共通語としての英語」が提唱されてきた。しかし未だ、国際共通語としての英語として完成された形というものはない。

本稿では、国際共通語として考案されてきた国際英語について再考し、また必要性から生み出されたリング・フランカとしての英語を比較することから、サピアの視点で真の国際英語にはどのようなものが望まれるべきかということについて考察したい。

1. 提唱されてきた主な国際補助言語としての英語

はじめに、これまでに提唱されてきた国際補助言語としての英語について取り上げる。言語の異なる人とのコミュニケーションをとるために、これまでに人工的なものも含め多くの共通語や国際補助言語が創られてきた。

本稿では、Charles Kay Ogden の Basic English、鈴木孝夫の Englic、Jean-Paul Nerriere の Globish を取り上げる。

まず、Ogden の Basic English について取り上げる。Basic English は、イギリスの心理学者であり言語学者でもある Charles Kay Ogden によって考案された。Basic English は、Ogden によって採択された基礎語850語を使って、本来の英語と同様の表現が可能とされるルールを定めたものである。Basic English の Basic は「基礎の」という意味を持つ他に、British, American, Scientific, International, Commercial の頭字語にもなっている。

Basic English には二つの主な目的があるとされている。

“Basic English has two chief purposes: (1) To serve as an international auxiliary language; that is to say, a second language for use throughout the world in general communication, commerce, and science. (2) To provide a rational introduction to normal English; both as a first step, complete in itself, for those whose national language is not English, and as a grammatical introduction, encouraging clarity of thought and expression, for English-speaking peoples at any stage of proficiency.” (Ogden 1968 : ii)

一つ目の目的として、国際的な補助言語として役立つことが挙げられている。これはすなわち、一般的なコミュニケーション、商業および科学において世界の至る所で使用されるための第二言語として役立つことを意図している。そして二つ目として、通常の英語への合理的な導入を与えることが述べられている。つまり国語が英語でない人たちの第一段階として役立つこと、またあらゆる熟達度における英語を話す人々の思考や表現の明瞭さを促進させる文法導入を提供することを目的としている。Basic English は国際補助

言語としての機能と通常の英語への導入の機能の二つを持ち合わせていることになる。

では Basic English は具体的にどのようなものなのだろうか。

There are only 850 words in the complete list, which may be clearly printed on one side of a bit of notepaper. But simple rules are given for making other words with the help of those in the list; such as *designer*, *designing*, and *designed* from *design*, or *coal-mine* from *coal* and *mine*. The word-order is fixed by other short rules, which make clear from an example such as "I will put the record on the machine here"...Whatever is doing the act comes first; then the time word such as *will*; then the act or operation (*put*, *take* or *get*); then the thing to which something is done, and so on. (Ibid : 47)

Basic English は850の単語から構成されている。しかし Ogden の単語リストには、実際に使うときには別途定義された接辞およびどの単語にも許されたあらゆる活用によって、拡張されるべき「基礎語」のみが掲載されている。例えば上の引用に斜体で *design* という単語が出てきている。この *design* という単語は Ogden の単語リストの中に含まれるが、*design* から派生した *designer*, *designing*, *designed* はリストの中には含まれていない。しかしこれらの単語は基礎語である *design* を知っていれば理解できる単語である為、Basic English として機能するということになる。また *coal-mine* (炭鉱) という単語は Ogden の単語リストの中には含まれていないが、単語リストに含まれている *coal* (石炭) と *mine* (鉱山) から作られた複合語であるため理解することができるということになる。このように、850の基礎語は複数の語を組み合わせたり、一つの単語に複数の意味を持たせたりすることで補われている。

Basic English ではさらに語順についてもルールによって決められている。まず行為をするものなら何でも文頭に来る。次に *will* のような時間の語句、それから *put*, *take*, *get* のような行為や操作の単語が来る。そして何かが行

われたものといった順序で並べられる。このように Basic English の語順は通常の英語の簡略化と解釈することができる。

そしてこの Basic English の最も大きな利点としてあげられるのが、習得期間の短さである。

Those who have no knowledge of English will be able to make out the sense of a radio talk, or a business letter, after a week with the word-list; but it may be a month or two before they are talking and writing freely. (*Ibid* : 48)

Ogden は英語の知識がない人でも、この単語リストがあれば一週間でラジオやビジネスレターの意味を理解することができ、さらには一、二ヶ月で自由に話したり書いたりすることができる」と主張した。

このように Basic English は短期間で習得可能な850という少ない基礎単語を用いて、英語と同じような表現を可能とした英語ベースの人口言語である。

次に鈴木孝夫の Englic について取り上げる。Englic は日本の英語教育批判から生まれたものである。鈴木はそれぞれの文化を大切にしたい英語、それぞれの言語が混じった Englic を使って意思疎通することで、その言語を使う人すべてが平等になる国際共通語としての英語が出来上がると提言している。Englic は英語の不規則な変化を無視し、イディオムの使用をやめ、早口を禁止するといった英語が母語ではない人にも平等なルールを構築している。

日本のインテリや社会の指導者が、肌で英語の必要性を感じ、その習得を力説する時、彼らの考えている英語とは、実はこの国際補助語としての英語なのであって特定の文化、文明、殊に英国のそれと密接に結びついた英語ではないのである。...英国固有の文化、文学、世界観と結びついた言語、そしてその分派であるアメリカの言語を English と従来どおり呼ぶなら、私が、今説明したような言語は、Englic とでも Interlingua とでも呼び変えるべきだと思う。English と Englic とは、たしかに歴史的発生的には密接な関係があるが今では別の存在なのであり、機能も異なっているのだとするのである。 (鈴木1971: 5)

引用にみられるように、鈴木は、特定の文化・文明に密接に結びついた英語 (English) と特定の文化・文明に結びつかない単なる国際補助言語としての英語 (Englic) は全く別物であると定義し、国際共通語として必要なのは、English ではなくそれぞれの文化に根付いた Englic であると主張したのである。

では具体的に、Englic はどのように English と異なるのだろうか。

フランス人の英語は下手だとか、インド人の英語は捲舌で分かりにくいとか、スペイン語系の人の英語は s と z の区別がないとか、今までよく言われるのは、これらの人々の使う言葉を狭い意味での英語という見地からのみ批判しているからなのだ。もっと大切なことは、お互いに勝手な自国語で話したのではまったく意思が通じないことの多い、多元的な現在の世界で、英語に近い言語としての Englic を使えば、立派に意思が通じるという認識である。…英語はもはや英語国民の特権的言語ではないことを認識すべきである。
(Ibid: 5)

鈴木は英語を英語国民のためのものではなく、国際補助語として使う人のためにも開かれた言語であるとし、それを Englic と定義している。Englic は、文化的自己植民地化をするのではなく、自分の文化を理解し、発信するために国際補助語としての英語を自覚的に利用しようという理念に基づいている。

最後に、Nerriere の Globish について取り上げる。Globish は Jean-Paul Nerriere によって共通語として提唱された英語の一種である。またネイティブ英語圏ではない地域での共通言語としての英語が、一般的に Globish と呼ばれることもある。Nerriere は2004年に Globish を言語として体系化するための編集作業を始めた。

次の引用は、Nerriere からの Globish の使用を考えている日本人へのメッセージである。

I call it "Globish", the language you Japanese, and I, French, and the rest of the

world are close to, instinctively. ...It is demonstrated that 96% of international communication involves at least one non-native English speaker. This is us. Globish is what has to be spoken there. In Globish, nobody is more equal than anybody else, and nobody can lose face, not even me. Globish level English is easier and faster to learn, and much less expensive than full English, which would take you more than a life time.

Jean-Paul Nerriere

(http://www.lingua-franca.jp/event/Globish_index.html)

Nerriere はコミュニケーションツールとしての英語を Globish として定義し、この Globish が、国際社会において話されるべき言語であると論じている。Nerriere は Globish を使用すれば、皆が平等となり、英語が完璧に話せなくても恥ずかしい思いはしないと主張している。Globish レベルの英語は、恐らく一生かけても習得することが難しい完璧な英語 (English) と比べて、はるかに簡単に速く、低コストで習得できることが特徴であるとされている。

このように Globish は国際社会において英語を母語としない人のための補助的言語を目指している。そのため Globish は平等な言語となり、完璧に話せなくても、過ちは気にする必要がないということになる。

では具体的には Globish はどのような体系を持っているのだろうか。

For Nerriere, Globish was a kind of linguistic tool, a version of basic or so-called Easy English with a vocabulary of just 1,500 words. As I saw it, however, "Globish" was the newly globalized lingua franca, essential English merged with the terminology of the digital age and the international news media.

Robert McCrum

(<http://www.thedailybeast.com/newsweek/2010/06/12/glob-ish.html>)

Nerriere の提唱する Globish は標準的な英文法であり、語彙には使用頻度が最も高いとされる英単語1500語が使用されている。Nerriere は、Globish

それ自体は「言語」では無く、「道具」であるが、むしろ英語を母語としない人が国際ビジネスに適応する為に生み出した共通語であると定義している。しかし引用に見られるように、英語作家であり編集者でもある Robert McCrum は、Globish をデジタル時代の専門用語と国際的ニュースメディアが融合された新たな国際化されたリング・フランカとして捉えている。国際ビジネスからとりのこされない為には、Globish に適応していかなければならないと Nerriere は主張しているのである。

このように三つの異なる国際補助言語として提唱されてきた国際英語について取り上げたが、どれも基本語彙の選択方法や、どの程度までを国際補助言語として許容するのかという問題など、様々な視点から批判をうけ、完全な形としての国際補助言語という段階には未だ至っていない。では次に必要性から生み出された国際補助言語としての英語について考察していく。

2. AAVE からみる必要性から生み出された補助言語としての英語

第一節で論じてきた、提唱されてきた主な国際補助言語としての英語とは対照的に、ここでは必要性から生み出された国際補助言語の中から AAVE (African American Vernacular English) について取り上げる。

では、AAVE はどのように必要性から生み出されてきたのであろうか。

What we do know is that the ancestors of most African Americans came to this country as slaves. They first arrived in Jamestown in 1619, and a steady stream continued to arrive until at least 1808, when the slave trade ended, at least officially. Like the forebears of many other Americans, these waves of African “immigrants” spoke language other English. Their languages were from the Niger-Congo language family, especially the West Atlantic, Mande, and Kwa sub-groups spoken from Senegal and Gambia to the Cameroons, and the Bantu sub-group spoken farther south. Arriving in an American milieu in which English was dominant, the slaves learned English.

(Rickford 1999 : 324)

たいていのアフリカ系アメリカ人の祖先はアメリカに奴隷としてやってきた。1619年に奴隷貿易が始まって以来、少なくとも表向きは奴隷貿易が終わる1808年までアフリカ系アメリカ人はアメリカにやってきつづけた。多くの他のアメリカ人の先祖同様、アフリカ移民たちは英語とは異なる、主にニジェールコンゴ語族の言語を話していた。英語が支配的なアメリカの環境に到着すると、アフリカ系アメリカ人たちは英語を学習した。これが AAVE の始まりとされている。しかしながら長年、AAVE は間違った英語として、非難の対象とされてきたのである。

しかしその見方は下の引用にみられるように少しずつ、変化してきたのである。

On 18 December 1996, the School Board in Oakland, California, passed a resolution regarding its policy in relation to the language skills of African-American pupils. ...they proposed teaching them Standard English through their 'mother tongue', African-American Vernacular English (AAVE), also commonly known as Ebonics (from 'ebony' and 'phonics').

(Jenkins 2003 : 102)

1996年12月18日オークランドの教育委員会はアフリカ系アメリカ人の生徒の言語スキルに関する政策を可決した。教育委員会はアフリカ系アメリカ人の生徒に彼らの母語であるエボニックスとしても知られる AAVE を通して、標準英語を教えることを提案したのである。つまり AAVE は間違った英語ではなく、英語とは異なった言語であるということが認められたのである。

では AAVE はどのような規則を持っているのだろうか。表 1.1 と表 1.2 は Rickford1999にまとめられている AAVE の特徴からの一部の引用である。まず表 1.1 には AAVE に特有な音韻音声の特徴がまとめられている。

- | | |
|----|--|
| 1 | Reduction of word-final consonant clusters (i.e., sequences of two or more consonants), especially those ending in <i>t</i> or <i>d</i> , as in <i>han'</i> for SE "hand," <i>des'</i> for SE "desk," <i>pos'</i> for SE "post," and <i>pass'</i> for SE "passed". |
| 4 | Realization of final <i>ng</i> as <i>n</i> in gerunds, e. g. <i>walkin'</i> for SE "walking." |
| 17 | Stress on first rather than second syllable, as in <i>pólíce</i> instead of SE <i>políce</i> , and <i>hótel</i> instead of SE <i>hotél</i> . |

(Rickford 1999 : 4 - 5)

Table 1.1 Distinctive phonological (pronunciation) features of AAVE

まず1では、語の最後の子音連結の現象が述べられている。AAVEでは、語末の子音連結、特に語末がtやdで終わるとき子音連結が減少する。例えば、SE (Standard English 標準英語) で *hand* / *hænd* / と発音されるものは AAVE では / *hæn* / と発音される。SE での *desk* / *dɛsk* / は / *dɛs* / と発音され、*post* / *poust* / は / *pous* /、*passed* / *pæ:st* / は / *pæ:s* / とそれぞれ発音される。

次に4では、動名詞の語末の *ng* は *n* として実現されるとある。つまり SE で *walking* / *wɔ:kiŋ* / と発音されるものが、AAVE では / *wɔ:kin* / と発音されることになる。

また17では AAVE における強勢のつけ方についての特徴が述べられている。AAVE では第二音節よりもむしろ第一音節に強勢が置かれる傾向がある。例えば SE では第二音節にアクセントがおかれる *políce* という単語も、AAVE では第一音節にアクセントがおかれ *pólíce* と発音されることになる。また、SE の *hotél* (アクセント：第二音節) は AAVE では *hótel* (アクセント：第一音節) と発音される。

表1.2には AAVE に特有な文法的 (形態的統語論的) 特徴がまとめられている。

- 19a Absence of copula / auxiliary *is* and *are* for present tense states and actions, as in “He Ø tall” for SE “He’s tall” or “They Ø running” for SE “They *are* running.”
- 19b Use of invariant *be* (sometimes *bees*) for habitual aspect, as in “He *be* walkin” (usually, regularly, versus “He Ø walkin” right now) for SE “He is usually walking/ usually walks.”
- 20a Absence of third person singular present tense *-s*, as in “He walk Ø” for SE “He walks.”
- 21a Absence of possessive *-s*, as in “John Ø house” for SE “John’s house.”
- 21b Absence of plural *-s* (much less frequent than 20a), as in “two boy Ø” for SE “two boys.”
- 22a Use of *ain’(t)* as a general preverbal negator, for SE “am not,” “isn’t,” “aren’t,” “hasn’t,” “haven’t” and “didn’t,” as in “He *ain’* here” for SE “He isn’t here,” or “He *ain’* do it” for SE “He didn’t do it.”

(Rickford 1999 : 6 - 8)

Table 1.2 Distinctive grammatical (morphological and syntactic) features of AAVE

19a では現在時制の状態や行為をあらわす繫辞や助動詞の *is* や *are* は、AAVE には存在しないということが示されている。つまり SE の “He’s tall” は AAVE では “He Ø tall” となり、SE の “They *are* running.” は AAVE では “They Ø running” と表現されることになる。(Ø はそこに何も無いことを表す記号である。)

次に19b では不変化の *be* の使用が取り上げられている。習慣的なアスペクトを表すとき、AAVE では普遍の *be* (時々 *bees*) が使用される。すなわち SE で “He is usually walking / usually walks.” と表現するところが、AAVE

ではどちらの表現も “He *be* walkin” と表現されることになる。

さらに20aには、AAVEには三人称単数現在を表す *-s* が存在しないと表記されている。したがって、SEで “He walks.” と表現するところが AAVE では “He walk \emptyset ” と表現されることになる。

また21a21bにみられるように、AAVEには所有を示す *-s* や複数形の *-s* が存在しないため、SEの “John’s house” や “two boys” は、AAVEではそれぞれ “John \emptyset house” “two boy \emptyset ” と表現されることになる。

さらに22aでは、AAVEにおける動詞直前の否定を示す語が述べられている。SEでは動詞の前の否定を表すために、“am not” や “isn’t” “aren’t” “hasn’t” “haven’t” そして “didn’t” といったような様々な語彙が用いられるが、AAVEではこれらをすべてひとまとめにして、*ain’* もしくは *ain’t* が用いられる。SEの “He isn’t here.” や “He didn’t do it.” は AAVEではそれぞれ “He *ain’* here” “He *ain’* do it” と表現されることになる。

このように AAVE の音韻的特徴を表 1.1 で、文法的（形態的統語論的）特徴を表 1.2 で見てきたが、それぞれの規則はとても簡素化された経済的な仕組みをもっているということがわかる。多くの表現を一つの表現で代用したり、三人称単数現在や複数形の *s* の削除、さらには語末の発音の脱落や SE と異なった強勢は、長い間、間違った英語と見なされ非難の対象になってきた。しかし AAVE は間違った英語ではなく、英語とは異なった別個の言語なのである。そして AAVE は英語よりもはるかに集約された体系を持ち、AAVE を使用することで、十分に意思疎通することが可能なのである。アフリカ系アメリカ人の必要性から生まれ、本来の英語とは異なる独自の体系を持つ言語が AAVE なのである。

これまで対照的な「提唱されてきた国際補助言語としての英語」と「必要性から生み出された国際補助言語である AAVE」について論じてきた。では私たちがこれから国際社会の中で国際補助言語として英語を使用するとき、私たちはどのような国際英語を求めていけばよいのだろうか。

3. 真の国際英語とは何か

既存の英語を国際補助言語として採択してしまうことの危険性に対抗する言語として、しばしば持ち出されるのが、Zamenhof の Esperanto である。

Zamenhof は世界中のあらゆる人が簡単に学ぶことができ、さらにすべての人の第2言語としての国際補助語を目指し、Esperanto 語を考案した。Esperanto のアルファベットは英語よりも多い、28文字とされている。Esperanto は人工言語であるため、公式にはどの自然言語とも類縁関係にないとされているが、実際にはヨーロッパの諸言語の語彙、文法が、大きく影響しているとされている。しかし Esperanto はどの国の言語でもないため、特定の人々に有利になったり不利になったりせず、使用者すべてが平等になるとされている。

では、Esperanto とは一体どのようなものなのであろうか。

ザメンホフはエスペラントの創始者として知られている。エスペラントは「人工語」と呼ばれることがあるが、他の多くの「人工語」とは異なり、エスペラントのみが単なる案の域を脱して、それを使う一定規模の持続的集団—言語共同体—を形成することができた。これは類例のない社会現象である。この意味でエスペラントは計画言語の名称がよりふさわしく、ザメンホフの最大の功績はそのような言語が成立しうることを実証したところにある。…エスペラントの歴史は、公式には、エスペラント博士の筆名で発表された『国際語』（1887）から始まる。永年温めていた国際語の案を公に提案する際、彼はエスペラントに対する提唱者としての特権を放棄した。…ザメンホフは単に便利な道具としてエスペラントを提唱したのではない。根底には人類愛やすべての民族の平等という少年期の素朴な理想主義があり、それを実現するための中立的な言語を希求したのだ。…初期のエスペラントイストの多くも民族の友愛という思想に多かれ少なかれ共感していたと言える。

（後藤 2001：16-17）

Esperanto は人工語、つまりどの文化や文明にも根付かない言語は、決して幅広く使用されることはないとする多くの見解に反して、見事に広まった。

今日 Esperanto を使用するエスペランティストは世界中に100万人程度存在すると推定されている。つまり Esperanto は現在も唯一幅広く使用されている国際補助言語ということになる。Esperanto がこのように幅広く国際補助言語として使用されてきたことには理由がある。それは Esperanto の提唱者である Zamenhof が提唱者としての特権を捨て、すべての人がその時代や文化に根付いた言語や文法を加えたり変化させながら、Esperanto が時代や文化によって変化していくことを許容したからである。Esperanto に完成形はなく、これからもまた時代や文化によって変化していきだろう。

さらに、アメリカの文化人類学者である Edward Sapir も国際補助言語として Esperanto のような人工語が望まれるべきだと提唱した。Sapir は国際補助言語はその時代に合わせて変化していくことが求められると主張した。

An international auxiliary language should serve as a broad base for every type of international understanding, which means, of course, in the last analysis, for every type of expression of the human spirit which is of more than local interest, which in turn can be restated so as to include any and all human interests. The exigencies of trade or travel are from this point of view merely some of the more obvious symptoms of the internationalizing of the human mind, and it would be a mistake to expect too little of an organ of international expression. But this is not all. The modern mind tends to be more and more critical and analytical in spirit, hence it must devise for itself an engine of expression which is logically defensible at every point and which tends to correspond to the rigorous spirit of modern science.

(Sapir 1931 : 111-112)

上の引用の中で Sapir は、「国際補助言語は、あらゆる型の国際的理解のための広汎な基盤として作用すべきである。もちろんその国際的理解とは、究極においては、地域的関心をこえたあらゆる形式の人間精神の表現を意味している。」と述べ、真の国際理解とは、人間が抱くありとあらゆる関心を含んだ共通理解のことであるということを指摘した。さらに Sapir は「現代

人は精神的にますます批判的、分析的傾向をもつため、国際的表現媒体は、あらゆる点で論理的な完璧さを持ち、しかも現代科学の厳格な精神に合致する傾向のある表現の機構を、みずから考案せねばならない。」と論じた。つまり真の国際補助言語は常にそのときそのときにあわせて変化していくことが求められていることになる。

また、Sapir は国際補助言語に対する人々の態度について論じている。

There are also other considerations that are of importance, and among them perhaps the most obvious is the attitude of people toward the spread or imposition of any national language which is not their own. The psychology of a language which, in one way or another, is imposed upon one because of factors beyond one's control, is very different from the psychology of a language which one accepts of one's free will. In a sense, every form of expression is imposed upon one by social factors, one's own language above all. But it is the thought or illusion of freedom that is the important thing, not the fact of it. The modern world is confronted by the difficulty of reconciling internationalism with its persistent and tightening nationalisms. (*Ibid* : 112)

Sapir は「自己の支配力がおよばない諸要因のために、結局は強いられることになる特定言語に対する心理と、自己の自由意志によって受容する言語の心理とはおおいに異なる。」と指摘し、国際補助言語に対する人々の心理的側面について言及した。英語が英語を母語としない人たちに対して何の配慮もないそのままの形で、国際補助言語になることはないと主張したのである。

さらに Sapir は「現代世界はインターナショナリズムと、粘り強く、しかも強固になりつつあるナショナリズムとの融和の難しさに直面している。」と論じている。つまり、Sapir は現代社会において、我々は国際的になろうとするインターナショナリズムとその国際性から自分たちの言語や文化を守ろうとするナショナリズムとの葛藤の中に生きていると指摘したのである。

国際補助言語は使用者に対して強制されるものではなく、使用者自身が自由意志によって受容していかなければならないものである。つまり国際補助言語使用者の必要性によって変化していくことができる言語こそが真の国際補助言語なのであると Sapir は提言したのである。

また、Sapir は使用者たちが考案した国際補助言語の精神的利点について述べている。

I have emphasized the logical advantages of a constructed international language, but it is important not to neglect the psychological ones. The attitude of independence toward a constructed language which all national speakers must adopt is really a great advantage, because it tends to make man see himself as the master of language instead of its obedient servant.

(*Ibid* : 119)

Sapir は、「すべての国の話者が採用せねばならない特定の考案された言語に対する自立的態度は実に大きな利点である。なぜならばそのような国際語は、言語に対する従順な召使としてではなく、言語の支配者として自己を考えさせる傾向があるからである。」と指摘している。社会の必要性から無理に強いられた国際補助言語を使用するとき、我々は国際補助言語の従順な召使となってしまう。しかし自分たちの必要性から作り上げた言語なら、私たちはその言語の支配者として自己を投影することができるという利点を Sapir は指摘したのである。

Sapir は私たちが国際補助言語とどのように向き合っていくべきかということについても提言をしている。

It would be exceedingly unfortunate if an international language, whether Esperanto or English or some form of simplified English, were looked upon as thenceforth sacred and inviolate. No solution of the international language problem should be looked upon as more than a beginning toward the gradual

evolution, in the light of experience and at the hand of all civilized humanity, of an international language which is as rich as any now known to us, is far more creative in its possibilities, and is infinitely simpler, more regular, and more logical than any of them. (Ibid : 121)

Sapir は「もし国際語が、たとえそれが 에스ペラント語や英語、ないしは何かの簡約化された英語の形式であるにせよ、それが採択のときから神聖で侵されない言語として見なされるとすれば、それはきわめて不幸である。」と論じている。Sapir は言語を神聖化すると、私たちには手のつけられないものになり、私たちの精神を決して満足させることができない言語になってしまうという危険性を指摘している。さらに Sapir は「これまでに知られたどのような言語にも匹敵する豊かさを持ち、可能性においてははるかに生産的で、構造は無限に単純で、より規則的で、どの国語よりも論理的な国際語の漸進的展開にむかって、国際語問題の解決が、経験的に、しかも高度な文明にまで達した人類の手によって開始されたばかりであると我々は考えるべきである。」と述べ、私たちは常に国際補助言語に介入できる支配者として国際補助言語と向き合っていくべきであるということを主張したのである。

Sapir は国際補助言語だけではなく文化について次のようなことを論じている。

The genuine culture is not of necessity either high or low; it is merely inherently harmonious, balanced, self-satisfactory. It is the expression of a richly varied and yet somehow unified and consistent attitude toward life, an attitude which sees the significance of any one element of civilization in its relation to all others. (Sapir 1924. In Mandelbaum ed. 1949 : 314-315)

Sapir は「本物の文化は必然的に高尚なものとか低俗なものというわけではない。それは、本質的に調和し、均衡がとれて、それ自身で満足するものである。それはおおいに多様性がある、にもかかわらず幾分統一されてお

り、首尾一貫した生活に対する態度、つまり他のすべての要素との関係において文明のあらゆる一つの要素の重要性を見るという態度の表現なのである。」と論じている。Sapir は本物の文化というものは、どんなに変化されても、首尾一貫した態度をとるものであると主張している。国際補助言語を一つの文化として解釈するとき、国際英語もまた様々に変化しながらも、首尾一貫とした態度をとる必要があると解釈することができる。

さらに Sapir は文化について次のようにも論じている。

Culture is not, as a matter of sober fact, a "given" at all. ...Culture is then not something given but something to be gradually and gropingly discovered. ...it is obvious that the child will unconsciously accept the various elements of culture with entirely different meanings, according to the biographical conditions...
(Sapir 1934. In Mandelbaum ed. 1949 : 596)

Sapir は「文化というものは事実として、まったく与えられるものではない。文化は与えられる何かではなく、段階的に手探りで発見されるものである。」と指摘している。つまり、Sapir は文化というものは与えられるものではなく、自ら獲得していくものであると主張している。国際英語にしても、はじめから枠組みを与えられるのではなく、自ら必要に応じて獲得していくことが求められるのではないだろうか。私たちに向かって強制的に与えられるような言語は、偽の国際補助言語であって、真の国際英語は自分たちの必要性から生み出し獲得していくような言語なのではないだろうか。

おわりに

本稿では、国際共通語として考案されてきた国際英語について再考し、また必要性から生み出されたリング・フランカとしての英語である AAVE を比較することから、サピア的視点で本物の国際英語にはどのようなものが望

まれるべきかということについて考察してきた。国際共通語として考案されてきた国際英語はその形式やルールが完全に決められており、それらを変化させることは困難である。したがってその言語を使う使用者のニーズに合わなくなるにつれ、その国際英語が完全に根付くことはなかった。AAVEは長年批判されてきたが、アフリカ系アメリカ人の人々の必要性から生まれ、変化してきた為、国際補助言語としての機能を持ちあわせるようになった。必要性から生まれ試行錯誤し変化してきたからこそ、AAVEは一つの国際補助言語としての地位を確立したのである。

国際英語は世界中の人々の国際補助言語になるため、それぞれの文化や必要性に根付いた言語へと変化していく必要がある。時代や必要性にしたがって変化していく国際英語こそが真の国際補助言語となりうるのである。国際補助言語を使用者としてただ単に受動的に受け入れる「言語の奴隷」にならずに、自分から積極的に関わり変化させていくことのできる「言語の支配者」になることが正しい国際英語との関わり方といえるのではないだろうか。

本稿は、京都女子大学英文学会2011年度大会（2011年10月29日）における発表原稿に加筆、修正を施したものである。

References

- 後藤 齊 (2001) 「ザメンホフ」『月刊言語』第30巻 (2001) 2月別冊号, pp. 16-17.
- Jenkins, Jennifer (2003) *World Englishes : a resource book for students*. Abingdon : Routledge.
- Mandelbaum, D.G. (ed.) (1949) *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*. Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press.
- Ogden, C.K. (1968) *Basic English International Second Language*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Rickford, J. R. (1999) *African American vernacular English: features, evolution, educational implications*. Malden, Mass: Blackwell Publishers.
- Sapir, Edward (1924) "Culture, Genuine and spurious" *American Journal of Sociology*, 29 in D.G. Mandelbaum, ed. 1949 : 308-331.
- (1934) "The emergence of the concept of personality in a study of cultures" *Journal of*

Social Psychology, 5 in D. G. Mandelbaum, ed. 1949 : 590 - 597.

— (1931) “The function of an international auxiliary language” *Psyche*, 11 in D. G. Mandelbaum, ed. 1949 : 110 - 121.

鈴木孝夫 (1971) 「English から Englic へ」『英語教育』10 : 4 - 5.

Robert McCrum (<http://www.thedailybeast.com/newsweek/2010/06/12/glob-ish.html>)

Jean-Paul Nerriere (http://www.lingua-franca.jp/event/Globish_index.html)